

湘北短大

中野洋恵

〔目的〕 1961年から64年にかけて、アメリカの心理学者ウィリアム・コーディルは生後3カ月の乳児とその母親を対象として母子関係の日米比較研究を行い、育児についての文化的差異を明らかにした。この研究から20年たった現在、両国の社会変動とともにこの文化的差異がどのように変化したかを探ることを目的とする。

〔方法〕 調査対象は、生後3カ月の乳児とその世話をする母親、日米各40組。15秒ごとに両者の行動を記録する時間サンプリング法をとった。調査時間は、午前10～12時、午後1～3時の計4時間で、1ケースについて乳児、母親とも800回のチェックが行われた。

〔結果〕 日本の母親においては、20年前多かった身体的接触が減少し、乳児との一体感が薄れつつあり、その距離をおしゃべりといった言語によるコミュニケーションでうめようとする傾向が濃くなり、こうした母親の態度に対応して、乳児も泣いたり、むずかかったりすることが減少している。一方、アメリカの母親の態度はこの20年間に大きく変化し、以前の時間通りの育児法ではなく、より多く乳児と接触し、乳児とよく遊び、愛情をしめし、できるかぎり話しかけ、あやせ、腕に抱くといった行動がとられ、この積極的な育児に対応して乳児の挙動の中では大きな動作が増加している。また、授乳方法も時間通りの哺乳びんによる授乳から乳児が欲しがる時に与える母乳中心の授乳へと変化している。

どちらの国にも育児様式についての時間的安定性が全しく、育児をめぐる文化はきわめて流動しつつあるということが明らかである。